

銅賞

東日本大震災から六年

横須賀市立神明中学校三年

野 中 秀 悟

僕はサッカー部に所属していて、その活動のいっかんとして宮城県に行き、宮城県のサッカー部の人達とサッカーをしてきました。

その時にすこしでも被災者の方々の力になれたらという思いから、募金活動をし、その金を使っておかしを買って、被災者の方々に届けることになりました。その活動の第一歩として、自分達で作った募金箱での募金をサッカーの練習の前後に駅の周辺で行いました。

部員を数人ごとのグループに分けて行うことになり、自分は5人くらいで宮城のサッカーをしている仲間のためにお金を集めたいんだという思いを自分の出せる精一杯の声で呼びかけ続けました。中には見向きもせずに、わざと遠くを歩いて素通りしていつてしまう人もいて、とても心が痛み、くじけそうにもなりました。しかし、自らよってきてくださり、「頑張つてね。」などの応援の言葉をくださった方も多数いて、そういう人達の言葉のおかげで、自分がつらくても呼びかけ続けることができたし、中には「ちょっとまってね。」

と言って家に帰り、自宅でためていた大量の小銭を募金してください。あった方もいて、僕はそんな人達の温かさにふれ、自身もすこし成長できたように感じました。後にしゅうけいをしたところ、募金活動の合計額は三十七万円にものぼりました。そのお金の一部を使って、何百という数のおかしを買って、それをくばる地域ごとに分けて、多くの人々の思いとともにバスで十時間近くかけて宮城県まで行きました。福島県に入っただけから車窓からのけしきは一気に変化しました。当初僕は、六年もたったからほとんどが直っているだろうと思っていましたが、それが大きな間違いであつたことにすぐ気づかされました。外のけしきは僕が思っていたものとは大きく異なり、一面いまだに盛り土がされているだけの場所が多くありました。そこで僕はようやく、ここは実際に東日本大震災の起きた場所で、多くの人大切な人や大切な物を失なった場所なんだと実感しました。そして、宮城県につき、最初はさんさん商店街が仮の場所にできていたのでそこで昼食を取りました。その店の人達も実際に被害にあつて自分達の店が津波で流されてしまったのに、とても明るく対応してくださり、僕達は勇気付けに行ったのに、逆に自分達が元気をもらいました。その後は、防災ちょうしゃという、当

時役員の人がつなみが来るということを町中に知らせ続けた結果、自身の避難が遅れ、防災ちようしゃごとつなみにまきこまれ、亡くなったという場所がほね組みのみ当時のまま残っていたので、そこに行きました。そのものじたいはテレビで見たことはありませんでしたが、実際に行ってみると、当時のつなみの威力が生々しく伝わってきました。また、そこには花たばや、線香があり、とてもかなしい気持ちになり、しばらくはそれから目がはなせませんでした。

その後、そのそばの中学校で試合をしました。僕は、自分達の大切なものを失なった子供達は気分がおちこんでいると思っていたけど、実際に一緒にサッカーをしてみると、みんな明るく、サッカーを楽しんでいて、自分がもし、家族などの大切な人や物がなくなったら、絶対おちこんで楽しくサッカーなんてできないと思うので、本当にすごいなと思いました。その後、かせつじゅうたくを一けん一けんまわって、おかしを配りました。そこでもみなさんとても明るく接してくださり、笑顔で受け取ってもらえたときは嬉しかったです。その次に行った中学では、六年たった今でもグラウンドにかせつじゅうたくがたっているため、荒れ地を手入れしたせまいスペースでサッカーをしていました。しかし、その状況でもみんな仲良

く、真剣にサッカーに取り組んでいました。また、そのボールは流されてしまったものの一部だと聞いた時は、自分達は本当に恵まれているんだなと思いました。

僕はこの宮城遠征を通して、あたり前はあたり前じゃないことや、仲間と協力することの大切さ、家族など、自分を支えてくれる人達への感謝の気持ちを忘れない大切さなどを実感しました。そして、東日本大震災も一じは注目されていましたが、その後の熊本大地震などの新しいニュースに気を取られ、こんなに多くの人がいまだに大変な思いをしている東日本大震災のことを忘れている人が多すぎるのではないのでしょうか。一人一人が知ることのできることもあると思うので、もっと多くの人に、東日本大震災を思い出し、くわしく知ってほしいです。